様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５９３２８３

研究課題名（和文）ナラティヴ・アプローチによる中堅看護師のキャリア形成プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a carrier formation program for the proficient nurse based on narrative approach

研究代表者
紙野　雪香（今井雪香）（kamino, yukika）

大阪府立大学・看護学部・准教授

研究者番号：１０２９４２４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、ナラティヴ・アプローチを基盤とした中堅看護師のキャリア形成プログラムの開発に取り組み、その成果を明らかにすることである。プログラムに参加した中堅看護師たちは、日常の看護実践を振り返ることで、自己の看護実践を重視し自己肯定感をもって未来を志向していた。そして、自己の将来像が立ち現われるとき、誰のものでもない“私”のキャリア形成が始まっていた。本プログラムは、実践的で具体的な内容である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to develop a carrier formation program for the proficient nurse based on narrative approach. Proficient nurses who participated in the program emphasized nursing practice and intended the future with self-esteem by looking back to daily nursing practice. And when an image of own future appeared, carrier formation had started. The results suggest the possibility that this program was practicing and useful.

研究分野：看護教育学

キーワード：ナラティヴアプローチ　看護継続教育　中堅看護師　キャリア形成　自己肯定感

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、「ナラティヴ・アプローチによる中堅看護師への教育的支援に関する研究」(平成 22－23 年度 研究活動スタート支援，研究代表者 紙野雪香)に取り組んできた。その結果、ナラティヴ・アプローチによる教育的支援は、自己の看護実践を重視し主体感覚をもって未来を志向するキャリア形成支援に発展可能な方法であることが示唆された。そこで、本研究ではナラティヴ・アプローチによる教育的支援方法をもとに、中堅看護師のキャリア形成プログラムの開発に取り組む。

中堅看護師に対する教育については、出産や育児などライフイベントが重なること、看護師としての発達度合いの個人差が大きい時期であること、「組織における役割」と、複雑雑多な課題が山積する「現場の実情」との狭間で葛藤することなどが課題として挙げられている。そのため、個人のニーズを尊重し個別性に対応した教育プログラムが求められている。中堅看護師の世界に寄り添い、その実情を分析しながら主体感覚をもって未来を志向するようなキャリア形成を考察する本研究は、まさに探求されるべき緊急性の高い課題である。

看護学領域におけるナラティヴ研究は、国内外ともに 2000 年より研究論文が増加しており、近年注目されている新しい概念といえる。研究内容を整理すると、ナラティヴを単なる語られた内容として位置づけ、逐語録の分析を行ったものが多く、従来の研究方法や研究成果とは大差がない。しかし、本来ナラティヴは語られた話と、語る行為の両方の意味を含んでいることがその特徴である。この２つの意味の関連をとらえきれていないことにより、ナラティヴ概念の混乱が起きている(吉村・紙野・森岡,2006、Yukika Imai Kamino・Yumiko Ohno,2007)。

ナラティヴ概念は、看護学領域においては新しい概念であること、複数の学問領域をまたぐ複雑な概念であることから、上述したような混乱が生じており看護実践において注目されながらも応用が難しい状況であると考えられる。本研究では、ナラティヴ概念の理論的背景を十分に踏まえ、その特徴をダイナミックに捉えた視点と看護教育分野との明確な接点を示す。そして、中堅看護師が“私の声”を紡ぎだし、主体であることの感覚を持ち続けることで、その人らしい多様で豊かなキャリア形成ができることをめざす。このように堅実なナラティヴ論に裏打ちされた資料は少なく、またキャリア形成としての実践報告も少ないため本研究テーマは意義深いといえる。

２．研究の目的

本研究では、次代を担う中堅看護師（現場の実務的リーダーを担い、管理職に従事していない看護師）のキャリア形成プログラムを開発する。したがって次の 3 点を目的とする。

(1) ナラティヴ・アプローチに基づくキャリア形成プログラムの枠組みを作成する。
(2)キャリア形成プログラムを実施し、具体的な内容を明らかにする。
(3)キャリア形成プログラムの通用可能性・応用可能性について検討し、成果と限界について明らかにする。

本研究の結果から得られた知見は、ナラティヴ・アプローチによるキャリア形成とは何かということと、そのプログラムの具体的な内容と指針、効果および限界を示すことができる。

看護学領域ではナラティヴ・アプローチへの関心が高いものの、実践方法に戸惑い、混乱が生じていることから、実施に際しての指針を示すことは実践上大いに貢献できる。また、臨床現場を懸命に生きる中堅看護師に寄り添った対話を基本としたかかわりは、あらゆる医療現場で広く活用可能な基礎的な知見として寄与すると考える。現任看護教育に携わる全ての人々に有効な示唆を提供できる。

３．研究の方法

(1) プログラムの内容

本研究の前段階の試行的介入研究にあたる「ナラティヴアプローチによる中堅看護師への教育的支援に関する研究」（平成 22～23 年度研究活動スタート支援、研究代表者：紙野）で得た成果をもとに、プログラムの枠組みを作成し、プログラム名を「ナラティヴ・プラクティス」とした。その概要は表１に示す。

表１　「ナラティヴ・プラクティス」の概要

目 的	ナラティヴ・アプローチ（ナラティヴ論を基盤として対象に接近すること／接近する方法）の学習と実践によって、自己の看護実践の意味を見出し、より生きいきと活躍することをめざす
目 標	①ナラティヴ・アプローチの理論的背景を知る ②ナラティヴ・アプローチの考え方を側に置きながら、自己の実践のとらえ直しを試みる ③②の実践の手ごたえについて考え、記述し、説明できる ④自己の実践を通した言葉で、ナラティヴ・アプローチの可能性と限界について考えることができる ⑤ナラティヴ・プラクティスを通した自己の変容について述べることができる

対 象	勤務リーダーの役割がとれる方で管理の職に従事してない方。 全回出席できる方（単回参加不可）。
方 法	月に１回、３時間。１年間。 少人数によるゼミ形式（事前学習を基本としたプレゼンテーションとディスカッション）
内 容	【ステップ１】 ナラティヴに関する理論的背景を知る 【ステップ２】 “私の実践”とナラティヴ・アプローチの接点について考える 【ステップ３】 “私の実践”を活写することへの挑戦 【ステップ４】 “私の実践”を伝えるということについて考える
支援目標(企画運営者の目標)	ナラティヴ・アプローチの実践およびその成果報告において、理論的背景、それらと看護実践の接点に対する自身の見解、当該内容に関する学術的な最新情報、メンバー間で有意義な議論が展開できる時間と空間を提供すること
評価の視点	これまでの看護実践および自己に対する新しいまなざし。 新しいまなざしが生まれるまでのメンバー間での対話のプロセス。

(2) 研究対象と方法

ナラティヴ・プラクティスは、急性期総合病院における中堅看護師研修として位置づけられ、参加希望者を募った。ナラティヴ・プラクティスの参加者のうち、研究参加への同意が得られた５名の中堅看護師を本研究の対象者とした。

ナラティヴ・プラクティス実施中の参加者同士の対話について研究者が記述したもの、【ステップ３】（表１）で参加者が活写したものをデータとした。

本研究方法の特色として、研究代表者自身がナラティヴ・プラクティスの企画運営者としてそのフィールドに参与していることがあげられる。本研究で得られるデータは、ある研究者のフレームで見て切り取った現実ではなく、研究者との相互作用を含めた現実ということになる。したがってキャリア形成の成果を分析する際、ナラティヴが本質的に内包する共同性と他者性を参考に①関係性②文脈③生成された意味④変化プロセス(森岡,2007、やまだ,2008)に着目し、データの分析を行った。

なお、本研究は、研究代表者の所属先（採択当時）の研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。研究対象者の参加にあたっては、参加は任意であること、同意しないことをもって不利益な対応を受けないこと、撤回の自由、研究の意義・目的・方法・期間、研究者の氏名および職名、予測される利益および不利益、研究終了後の対応、個人情報保護、個人情報保護の上で研究成果の公表の可能性、資金源、データの保存および使用方法と保存期間、問い合わせ方法等について十分説明し、文書による同意を得た。研究を遂行するに際には対象者との同意事項を遵守した。

４．研究成果

ナラティヴ・プラクティスに参加した中堅看護師には、明らかな変容が起きていた。ここでは、その変容の内容および、本プログラムとの関連について述べる。そして最後に、成果の国内外における位置づけと今後の展望について述べる。

(1) “私らしい看護実践像”の言語化により肯定的自己意識をもって未来を志向する

ナラティヴ・プラクティスの参加者には明らかな変容が起きた。“私の看護実践”に意味が生まれそれを重視すること、“私らしい看護実践像”の言語化により肯定的自己意識をもって未来を志向することである。これらの変容は、ナラティヴ・プラクティスの特徴である、自由に語り合う場(Anderson.H&Goolishian.H.,1992）の設定、ナラティヴ的思考モード(Bruner J.,1986)による私の経験世界の記述によって起こっていた。ナラティヴ・アプローチの理論的背景を学び、その視点で自己の看護実践を捉え直すということは、患者を１人の“あなた”として関心を維持し、実践する“私”を取り戻すことを可能にした。そのことを通して“私の看護実践”に意味が生まれていた。言語化（語る、記述する）という作業は、実践をみえやすく、明快に、仕事の中核とするのに役立っていた。そして、“あなた”との間に起こった“私の考える看護実践”に自信をもち、自分を信じることができるという成果が現れ、将来のなりたい自分、実践したい看護について語るという現象が起こった。病院組織が求める役割や患者が求めるあるべき看護師像が増大し、過度な標準的「べき論」から自分を見失っていた看護師たちが肯定的自己意識をもって未来を志向し、私の将来像が立ち現れるとき、誰のものでもない“私のキャリア形成”が始まっていた。

看護師のキャリア形成はベッドサイドを離れることではない、直接ケアを重視する(Trish G.,2003）という立場にたったとき、以上の成果は、日常の何気ない風景を振り返ることで、自己の看護実践を重視し肯定的自己意識をもって未来を志向するキャリア形成支援方法であることが示唆される。

(2)研究成果の位置づけと今後の展望

以上の研究成果については、関連学会だけでなく、臨床現場に赴き公開シンポジウムを開催することで、「ナラティヴ・アプローチによる中堅看護師のキャリア形成プログラム」の臨床現場での応用可能性を検討した。どの会場も立ち見がでるほどの関心の高さで、集まった方々の反応からもプログラムの内容と成果については、臨床の課題にマッチした新規性のある実践的なものであると考える。

一方で、「このプログラムを運営できる人が院内にいるだろうか・・」「院内研修とするならば評価をどのようにすればよいのか」という意見を頂いている。残された課題として次の 2 点が挙げられる。1 点目は、本研究の成果である「ナラティヴ・アプローチによるキャリア形成プログラム」をナラティヴ概念の理論的背景を理解した上で運営・実施し、各臨床単位になじむような自由に語れる場を創っていくことができる人の育成である。2 点目は、本プログラムの評価方法である。これらの課題は、臨床からの意見に応答するものであり、より実践的に発展させていくために今後も継続的に取り組んでいくこととする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①紙野　雪香、ナラティヴ看護実践の試みと未来、N：ナラティヴとケア、査読無、7 巻、2016、2-5

②森岡　正芳、ナラティヴ実践研究の成果と課題―看護ケアの場面において、N：ナラティヴとケア、査読無、7 巻、2016、82-88

③福田　敦子、“私”は確かに存在することから始まる看護研究、N：ナラティヴとケア、査読無、7 巻、2016、68-74

④大野　由美子、看護実践の生き詰まりを開くナラティヴ・アプローチ、N：ナラティヴとケア、査読無、7 巻、2016、13-20

⑤紙野　雪香、ナラティヴ・アプローチに基づいた看護実践のとらえ直し、奈良女子大学大学院人間文化研究科年報、査読有、29 巻、2014、23－32

⑥紙野　雪香、看護実践におけるナラティヴ・アプローチの応用、看護実践の科学、査読無、37 巻、2012、8－13

⑦紙野　雪香、物語られるプロセスと看護実践の可視化、看護実践の科学、査読無、37 巻、2012、34－41

⑧紙野　雪香、感染管理看護を拓くナラティヴ・アプローチ―語る、動く、育む―、感染管理看護研究会誌、査読無、2 巻、2013、1－5

〔学会発表〕（計５件）

①紙野　雪香、福田　敦子、大野　由美子、松月　みどり、岸　あゆみ、“私”の看護の可視化と実践を意味を見出すナラティヴ・アプローチ―対話形式による公開シンポジウムを通して―、第 18 回日本看護管理学会、2014 年 8 月 30 日、ひめぎんホール（愛媛）

②福田　敦子、紙野　雪香、大野　由美子、看護臨床の対話の場を創造する実践的ナラティヴ・アプローチの可能性、第 34 回日本看護科学学会、2014 年 11 月 30 日、名古屋国際会議場（愛知）

③紙野　雪香、ナラティヴ・アプローチによる中堅看護師への教育的支援、日本保健医療行動科学会第 27 回大会、2012 年 6 月 16 日、じゅうろくプラザ（岐阜）

④紙野　雪香、岸　あゆみ、吉井　輝子、中堅看護師が生きいきと輝くためのナラティヴ・アプローチの実践―“私”の声、そしてキャリア形成―、第 22 回日本看護学教育学会学術集会、2012 年 8 月 4 日、熊本県立劇場（熊本）

⑤紙野　雪香、内本　千雅、渡邊　千登世、看護の質の可視化と向上をめざすナラティヴ・アプローチの実際―時間が変わる、言葉が生まれる、“私”を感じる―、第 16 回日本看護管理学会年次大会、2012 年 8 月 24 日、札幌コンベンションセンター（札幌）

〔図書〕（計１件）

①紙野　雪香（分担執筆）、森岡　正芳（編）ミネルヴァ書房、臨床ナラティヴアプローチ、2015、288（129-145）

〔その他〕

ホームページ

①紙野　雪香 WEB SITE
http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/~kamino/

公開シンポジウム

②紙野　雪香、福田　敦子、大野　由美子、野村　直樹、富田　昌代、高橋　清子、ナラティヴって？　看護実践における応用　1 人ひとりの看護実践の物語「語る―きく」のコラボレーション、公開シンポジウム、2014 年 9 月 6 日、静岡県看護協会（静岡）

③紙野　雪香、福田　敦子、大野　由美子、

森岡　正芳、松月　みどり、ナラティヴって？　看護実践における応用　“私”の看護実践を「語る―きく」場の創造、公開シンポジウム、2013 年 10 月 27 日、北松中央病院（長崎）

６．研究組織

(1)研究代表者

紙野　雪香（今井　雪香）（KMINO, Yukika）
大阪府立大学・看護学研究科・准教授
研究者番号：１０２９４２４０

(2)研究分担者

森岡　正芳（MORIOKA, Masayoshi）
立命館大学・総合心理学部・教授
研究者番号：６０１６６８７

福田　敦子（FUKUDA, Atsuko）
神戸大学・保健学研究科・講師
研究者番号：８０２９４２３９

(3)連携研究者

大野　由美子（OHNO, Yumiko）
大阪大学・医学部附属病院・専門看護師
研究者番号：４０６２６５６１